2023.11.20　『平安神宮 2020』を再掲

シリーズ《生き続ける文化財》：『平安神宮』と『京都市美術館』

2019 年 11 月 16 日に京都市美術館リニューアル工事の完成記念式が行われ，午後には見学会も催されました。時代祭の時にはまだ残っていた工事用の塀が取り払われ，美術館の玄関前が広々としたオープンスペースとなって，大鳥居から平安神宮まで，東山を眺めながらゆったりと散策ができるようになりました。そこで今回は，時代祭の到着地である平安神宮とリニューアル工事が完了した新生美術館の周辺を歩きましたので，その様子をレポートします。

《ご紹介》

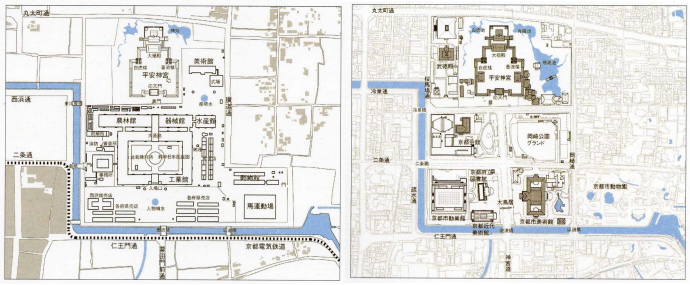
岡崎公園には二つの基軸線がある。一つは平安神宮の軸線，もう一つは神宮道（応天門通）の軸線であり，二つの線には 4 度のずれがあるという（参考：「藝文京」2019.春）。それを確かめるため，望遠レンズを使い，平安神宮の大極殿中央に立って応天門中央を撮影したのが右の写真である。確かに門の中の大鳥居は左にずれていた。

平安神宮は，明治 28 年の第四回内国勧業博覧会と同時期に開催された，平安遷都千百年紀念祭の紀念殿として創建されており，施設配置の基軸線は平安京に合わせて真北である。社殿は，桓武天皇が開かれた当時の平安京の正庁，朝堂院を約８分の５の規模で再現しており，大極殿･応天門･蒼龍楼（そうりゅうろう）・白虎楼（びゃっころう）・東西歩廊は創建当時に造営されたもので，それから 115 年たった 2010（平成 22）年に重文に指定された。 1940（昭和 15）年には孝明天皇ご鎮座にあたり本殿などが増改築され，その後も大修理や災禍の復興も行われ，現在の姿になっている。

この博覧会と紀念祭を契機に，岡崎エリアは都市の広場としての機能を充実していく。平安神宮建設の 4 年後に武徳殿，その 4 年後に動物園，更にその 4 年後に府立図書館と，現存する明治期の施設が次々とつくられていく。また平安神宮は，東側の博覧会施設（美術館）跡地に現在の平安神宮神苑を整えている。

一方の大鳥居は，昭和 3 年の大礼記念京都大博覧会の際に，応天門と疏水に架かる慶流橋とを結ぶ軸線（応天門通）上に設けられた，高さ約 24 m，鉄筋コンクリート製の鳥居である。大鳥居の

➢　第四回内国勧業博覧会（左）と現在（右）の岡崎公園
（出典：京都岡崎の文化的景観パンフレット）



➢　大鳥居と応天門

七五三　つがいの鴛尾に　一礼し

西側にある 1909（明治 42）年建設の府立図書館は，この軸線に平行して建っていて，明治後期の岡崎公園整備で設けられた基軸線であることがわかる。この図書館に対面して 1933（昭和 8）年に開館した京都市美術館（※）は，建物の軸線が平安神宮と同様に真北方向を向いている。（※昭和天皇即位の礼を記念し「大礼記念京都美術館」という名称で 1928（昭和 3）年に建設）

「大礼記念京都美術館」建設から 92 年たった今年，京都市美術館が「京都市京セラ美術館」として 3 月 21 日にリニューアルオープンする。同館のパンフレットは「建築家青木淳・西澤徹夫による，壮麗な歴史的美術館建築の画期的大規模リノベーション！」と紹介し，青木淳氏が「像を重ねていく美術館」と題して，設計の想いを寄せている。

建築とは，「多重露出された像が幾重にも折り重なり，豊かな襞（ひだ）がつくられていくものです。」今回の計画では，「すでにこれまでに重なってきた像の層を引き継ぎ，そこに新たな一枚の像を加えようとしました。」なかでも大事にしたのは，「西側・神宮道側の前広場を広場として残すことと，この建築がもともと持っている西玄関から東玄関を貫く軸線を強めることでした。」そこで西側エントランス前にスロープ状の広場を設け，その側面に新たな空間『ガラス・リボン』を生みだすとともに，地下エントランスから中央ホール，東玄関，さらに東山を望む日本庭園までつながる一直線の強い軸線空間を挿入し，「この美術館に埋め込まれていた軸性を引き出そうとしました。」と説明している。そして，「私たちは，新旧の対比を生み出すことを目指す改築とはまったく異なる，より繊細なもうひとつの改修の道を築こうとしてきました。」と結んでいる。

新たに誕生するスロープ広場と解放された日本庭園とがコラボする，新生美術館のオープンが待ち遠しい。また大鳥居を挟んで対面する，府立図書館と新生美術館との夜景の競演も楽しみだ。

➢　京都市京セラ美術館

祝あかり　期待片手に　新館長